

口絵

「浪華道頓堀 二替芝居積物一覧」 大奉書錦絵 (37.8×50.4cm) 1枚 絵師：菊水茂広



図版解説

幕末の上方歌舞伎界は、11月は京都で「顔見世」を、正月は大坂で「二の替り」を興行するようになっていた。この一枚摺は元治2年（1865）の二の替り興行の賑わいを描いている。

本来の二の替りは正月2日が初日であるが、この年は遅れて2月5日からの上演であったことが役割番付からもわかっている。画面上部には「中芝居芸題 けいせい恋関札、角芝居芸題 けいせい曾我譚 切狂言 国性爺」と外題が記されている。この時、中の芝居では上方歌舞伎界の大物である初代実川延三郎が養父の実川額十郎の名跡を二代目として、子の延太郎が二代目延三郎を襲名した。そして、角の芝居では重鎮の二代目尾上多見蔵が別座で出演し、初代三枘梅舎が五代目三枘大五郎を襲名したのである。額十郎と大五郎はともに各座の座頭を務めており、こうした大物役者の襲名で道頓堀（川竹）は賑わいを見せた。画面上部の文章を以下に翻刻しておく。

今年元治二乙丑正月下旬より 川竹両芝居二の替りの節 中の芝居にて延三郎は父の名二代目
実川額十郎と改 座頭を被勤 倅延太郎は二代目実川延三郎と改 又角の芝居 尾上多見蔵は
別座に成りて 梅舎が五代目三枘大五郎と師の名を継いで 是も同く座頭を勤るゝ折から 諸
方より立る 幟は美吉野の一目千本にも異ならず 米俵 酒樽 鯉樽 炭薪の積物の夥しき事 東
は日本橋より西は戎橋え入町迄 軒を並べて積上たり 是を見物に来る人にて 道頓堀は爪も
た、ぬ人群集は前代未聞の賑ひなり 二月五日初日より廿五日迄は場さじき上下共不残売切て
断書を出し 又茶楼より芸子の花を言て行に翔あるきてさがせども一人もなく 皆々芝居の約束
也 かゝることは誠に思ひ儲けぬ事なれば 近辺は軒に十樽甘樽を積て用水を出し 昼夜空の
本に心を附 其混雑筆紙にもものべがたく 爰に百部が一を画に著して 此ことを見ざる遠き国々
の人にもつたへ 又は後の世にかゝる事のありしなど 徒然の物がたりにもなし 昔なつかし
といふ人もあれかしと 愚かにも書しるす事とはなりけらし

改名を祝す芝居の角中や どちらを見ても千金の春

心あらん人を見せばや川竹の 芝居わたりの今の景気を 合ノ亭歌鳴

最後の歌二首（もしくは本文全体）の作者の合ノ亭歌鳴は、この頃の流行唄である大津絵節の作詞者として知られていた。大津絵節は落語家が高座で歌うことも多く、歌鳴は芝居ネタの大津絵節、そしてその歌詞が掲載された一枚摺を多く残しているのである。

画面左下には道頓堀川が描かれ、船にも大量の積物がある。これから劇場前に積み上げるのであろう。その向こうの船からは人々が降りて、そのまま芝居茶屋へ入っていく。船の右側に描かれているのは太左衛門橋で、橋の上にも人だかりができています。積物が誇張されているので、道頓堀の景観は正しく描かれていないのだが、画題下に「酒五ト五樽 幟一 ざこば 実川額十郎」とあるのは、大坂の鼯鼠連中の一つ、ざこば連中が実川額十郎宛に酒五斗を五樽、幟一本を進上したことが記されているのである。他にも誰がどの役者宛にどのような品を進上したのかを明記している点が興味深い。さらに、左欄外には「中ノ芝居 初日より十日ノ間売高一万二千六百六十一軒」「角ノ芝居 初日より十日ノ間売高一万八千九百七十八軒」と売り上げに関する記述があることも珍しい。

江戸時代最後の道頓堀両座の賑わいを、今日に伝えてくれる興味深い作品である。

（北川 博子 関西大学非常勤講師）